



ショートコメント

★★★

Data 2022-123

監督：イ・サンヨン

出演：マ・ドンソク／ソン・ソック／チェ・ギフ  
ア／パク・チファン／ホ・ドンウォン／ハジ  
ユン／チョン・ジェグ  
アン

## 犯罪都市 THE ROUNDUP

2022年／韓国映画  
配給：HIAN／106分

2022（令和4）年11月5日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

### みどころ

マ・ドンソクとラブリーを合わせて“マブリー”。それが韓国の衿川（クムチョン）署の強力班に勤務する、“狙ったホシは半殺し”という、規格外の最強刑事（デカ）、マ・ソクト。あの巨体とあの拳に注目！

本作は韓国で観客動員1200万人を突破するメガヒットだから、クリント・イーストウッドが演じた『ダーティハリー』のようなシリーズ化も確実！  
もっとも、今回の「犯罪都市」はベトナムの首都ホーチミン市だが、ずっとそんなタイトルでいいの・・・？

なぜベトナムへ？そしてクライマックスでは、なぜ再び韓国へ？それは最凶犯との銃拔きのバトルを楽しみながら、あなた自身の目でしっかりと！頭を空っぽにして楽しめばそれなりのものだが、逆に言うとそれだけのもの・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

◆日本人にとって最も有名な韓国人俳優はソン・ガンホだが、近時それに迫っている（？）のが、一目見ただけその顔、名前、そして体格を覚えてしまう俳優マ・ドンソク。私が彼をはじめて見たのは『悪人伝』（19年）『シネマ47』（229頁）だが、今やマ・ドンソク+ラブリー=マブリーという愛称が定着しているらしい。あの体格にはレスラーが最適だがそんな映画はそうそう作れない。そこで、彼の“はまり役”は、あの体力と格闘能力を駆使し、“狙ったホシ（犯人）は半殺し”という規格外の最強刑事（デカ）になったらしい。

『犯罪都市 THE ROUNDUP』と題された本作は、2017年に大ヒットした『犯罪都市』の続編だが、韓国で観客動員1200万人を突破するメガヒットを記録したらしい。そうなれば、今後シリーズ化が確実だが、そもそも犯罪都市ってどこの都市？まさか、大阪や東京ではないと思うのだが・・・。

◆ベトナムは、かつての宗主国だったフランスを追い払い、その後はアメリカ帝国主義に

も打ち勝った国。その首都はホーチミン市だが、その名前の由来は、米国からの支援で成立したベトナム共和国と南ベトナム解放民族戦線（通称ベトコン）をベトナム戦争で打倒した、ベトナム民主共和国の指導者であるホー・チ・ミンの名前。つまり、ソ連で、スターリングラードとかレニングラード等の都市名になっているのと同じだ。そして、そこは、かつての南ベトナムの首都サイゴンがあったところだ。

本作で「犯罪都市」と呼ばれているのは、そのホーチミン市。その理由は本作冒頭で解説されるが、そんな設定についてベトナムやホーチミン市から抗議はなかったの？

◆かつての日本の大映映画には『悪名』シリーズがあり、勝新太郎と田宮二郎の凹凸コンビが大活躍していた。『犯罪都市』シリーズにおける、刑事マ・ソクト（マ・ドンソク）と班長チョン・イルマン（チェ・グィファ）のコンビは少しそれと似ているから（?）、本作はそんな凹凸コンビの役割分担や相性の視点からも楽しみたい。

クムチョン署強力班に勤務するマ・ソクトとチョン・イルマンの2人がベトナム行きを命じられたのは、近時韓国系犯罪者で満ち溢れている東南アジアの都市ホーチミン市に赴き、「自首してきた」犯罪者の一人を無事に引き取るためだ。そんな簡単な任務（?）に班長が自ら志願したのは半分観光目的だったが、なぜその男は自首してきたの？

ホーチミン市に着いたマ・ソクトがそれを得意の腕力に任せて解明していると、その男のバックには冷酷な凶悪犯罪者カン・ヘサン（ソン・ソック）の存在と、彼が引き起こしたいくつもの誘拐事件の存在があることがわかってきたからヤバイ。韓国人を救うため、韓国の刑事は働かさなければ！それがマ・ソクトの言い分だが、ここはベトナム。勝手な動きをされては迷惑だ、と現地のベトナム警察は警告を発したが・・・。

◆ハリウッドシリーズの刑事には異色刑事がたくさんいる。クリント・イーストウッドが演じた『ダーティハリー』はその1つだが、彼は大きな拳銃を武器にしていた。しかし、刑事マ・ソクトは拳銃を使わず、すべて肉弾戦で立ち向かうのが特徴だ。

対するカン・ヘサンも拳銃を使わず、もっぱら菜切り包丁のような凶器を振り回すのが得意らしい。そのため、班長のチョン・イルマンも一度はその餌食になり大ケガ（?）を負うし、身代金を要求された大企業の社長チェ・チュンベクも大変な目に遭ってしまうから、本作ではカン・ヘサンの凶悪ぶりをしっかり確認したい。

また、韓国映画ではキャラの立った役がいろいろ登場するのが面白い。本作にもマ・ソクトにイヤイヤ協力をする（?）怪しげな男チャン・イス（パク・チハン）が登場し、クライマックスに向けて大活躍（?）するし、導入部ではチェ・チュンベクのバカ息子（?）もベトナムでのリゾート開発についてそれなりの問題提起をする（?）ので、それにも注目。

◆犯罪都市=ホーチミン市と設定されているにもかかわらず、本作後半からクライマックスにかけての舞台は再び韓国になる。それは意外な抵抗を見せたチェ・チュンベク社長に復讐するべくカン・ヘサンが韓国に乗り込んできたためだが、私が考える本当の理由は、ホーチミン市では、クライマックスでのド派手なカーチェイスシーンを撮影できなかったためだ。高速道路や港湾をハチャメチャにし、デパートの内部までもメチャメチャにしたがらの犯人追及、犯人逮捕のクライマックスの撮影はさすがにホーチミン市の許可が下りなかったのでは・・・？

「最強」VS「最凶」の激突のコングが今鳴り響く、と謳われ、チランには「規格外のヤバイ刑事（デカ）が拳ひとつで犯罪都市をブツ叩く！」と表現された本作の面白さは、あなた自身の目でしっかりと！新聞紙評でも「豪快娯楽の幸福ざっしり」と書かれているが、逆に言えば、本作はそれだけの娯楽映画化も！

2022（令和4）年11月10日記